

皇國經濟論

南 亮 三 郎

八六

本稿は經濟專門學校第一學年に於ける新科目の一つとして文部省により制定せられたる「商業經濟論」の教授要項に則り、その第一章として筆者の擔當せる「皇國經濟」の講義要旨を取りまとめたものである。講義開始までに何程の準備期間もなく、あわただしい氣持で新講座の一部を擔當したので、その要旨を録した本稿は決して完全なものではない。況んや學者に呈すべき研究論文でもないのであるが、科目が新科目であるだけ受講學生のみならず各方面に幾らかの參考となるであらうと考へて、こゝに發表するに至つた次第である。

(昭和十九年七月、札幌北サノヒ工事現場、軍宿舍に於いて)

第一節 皇國經濟の本義

一、國家とは何か

吾々は國の中に生きてゐる。國と共に生きてゐる。そして一層端的に云ふならば、吾々は國を生きてゐるのである。然らば先づ「國」とは何であるか、「國家」とは何であるか。

およそ何れの國家も國家であるがためには三つの要素を具有しなければならぬ。一は領土、二は人民、三

は統治權である。領土なしに國家はあり得ず、人民なしに國家はあり得ず、さらばとてまた統治權なしに國家は成り立ち得ない。ところで、これら三つの要素から成り立つ國家の本質については、學者の説は次の通り區々に別れる。

その一に曰く、國家はあらゆる生物と同じく一箇の有機體にして、それは腦髓をもち、身體をもち、四肢をもち、器官をもち、また意志をさへ有すると。これを國家有機體説といふ。この學説は生けるものとしての國家を理解するに便である。また國家は何故に自己存在の權利を主張しうるかを説明するには大いに役立つ。國家は一箇の生物である以上、みづから生きる權利を他の諸々の生物に向つて主張しうるからである。しかしこの學説では、國家の中に包含された一切の部分有機體、すなはち一切の個人が、何故に自己と對等の單なる一生物としてこの國家を尊敬せねばならぬか、進みてはまた何故にその國家のために自己の生命をさへ捧げねばならぬかは説明され得ない。

その二に曰く、國家は權力體であると。これは國家權力體説と稱してよい。成る程、國家は絶大な權力を有してゐる。この權力は吾々の日常の經驗ではあまり意識に上つて來ないかも知れぬ。しかし、この事實を知らうと思へば、假に一つの犯罪を犯した場合を想像して見るがよい。犯罪者は直ちに捕へられ、留置場に押し込められ、法廷に引き出され、そして場合によつては彼れの残りの全生涯をさへ監獄の中に送らねばならぬのである。^{*}かゝる偉大なる權力は、實に、地上に於いては只國家のみが持つところである。然らば國家の本質は權

力體にあるか。吾々の日常の經驗は、かゝる偉大なる權力さへ殆んど意識に上さないほど、國家の本質が決して權力體そのものでないことを物語つてゐる。かゝる權力は犯罪があるから發動されるのである。犯罪がなければ、かゝる權力は無用となるであらう。權力が無用となれば國家もまた無用となるか。答へは言はずして明かであらう。國家は單なる權力體ではないのである。

* 公表數字によれば昭和十三年日本内地警察官吏總數は七三、五九五人であり、また昭和十二年内地在監者總數は五三、五一二人である。

その三に曰く、國家は一つの構成體であると。これを國家構成體説と名付ける。この學說によると、國家は民族及び經濟とともに人間共同生活の基本關係に立脚して造營せられたる構成體である。人間共同生活の基本關係とは第一に血の繋がりに立つ「生活親和」であり、第二に人間の意欲と意欲との衝突から起る「生活相剋」であり、第三に人間の意欲と能力との先天的な不調和から生ずる「生活困窮」である。第一の生活親和に基づいて造られた構成體が「民族」であり、第二の生活相剋を克服するために造られた構成體が「國家」であり、第三の生活困窮を能ふ限り調整せんとして營まれる構成體が「經濟」である。しかし民族、國家、經濟の三者は同格の地位を占めるのではなく、最高の地位を占めるものが民族で、國家と經濟とはこの民族に奉仕するためにのみ存する。かう説くのが有名なゴットル(F. v. Gottl-Ortlilienfeld)の構成體學說である。この學說は國家を人間共同生活の一つの在り方として、しかも極めて深い根據からそれを説明し、そして他の諸々の

構成體との相互の關聯に於いて説かうとした點で勝れてゐる。しかし誤りは重大である。それは先づ國家を單なる權力體と見る點で誤つてゐる。次いでは國家を民族の下に置き、國家と經濟とがこの民族に奉仕するものと考へる點で誤つてゐる。少くとも吾々の場合、吾々の祖國の場合には當てはまらない。

かくて吾々は、吾々自身で、吾々自身の國家を考へなければならぬ。

二、日本國家

さて、こゝにまづ寛博士の言葉がある。「國家の本質は時と所とを異にして存する無數人の本來の一心同體に歸するが、此の各人が本來の一心同體であることは皇國建國の根據たる不動の信仰であり、皇國當初よりの事業である。此の事は皇國に就て殊更模範的に實現せられ來つたのである。皇國が腕力強力沙汰で成立し存在しつつあるものと見るのは極めて卑近淺薄なる見方といはねばならぬ。強力は皇國古來のカミナガランミチ惟神道即ち隨神道に依り高天原を此の現世に實現せられつつあるものに外ならぬ。此の隨神道の精髓は何であるかと申せば、本來動きなく定まりつつある御一系唯一なる 天皇の總攬の下に、之と離れぬ上下人々の本來の一心同體を實現することを申す。」（寛克彦、國家之研究、第一卷）

この説明の中には、極めて明瞭に、およそ國家の本質は何であらねばならぬか、またわが日本國家はいづかに萬國を絶したる尊嚴があるかが示されてゐる。すなはち、およそ國家の本質は「時と所とを異にして存する無數人の本來の一心同體」でなければならぬとするのであつて、これを現代通行の學術語に言ひかへるなら、

そこにいふ「無數人」こそ「國民」であり、「民族」であり、また「本來の一心同體」と呼ばれるものは純粹なる意味での「共同體」に外ならない。かう解してみると、笈博士の國家觀は國家をもつて嚴密なる意味での「民族共同體」と見るものであつて、日本國家の本質はまさに「天皇の總攬の下に」あるところの、そしてこれと離れがたく、いはば中心歸一的に結び合つてをるところの「民族共同體」である、といふことになる。従つて吾々は、この 天皇の總攬の下に中心歸一的な民族協同體を形成してをる日本國家を、はじめて純粹の「民族國家」と稱してよろしいと思ふのである。

日本國家、すなはち皇國にも、無論、國家の通有性に従つて「權力」はある。また日本民族には、後述のごとく、幾つかの異なる血液を融合せしめて成り立つたといふ人種學的事實はある。しかし、日本國家は、さういふことには係はりなく 天皇の御存在と共に、はじまつたのであり、そして日本民族はこの國家の中に包被せられてはじめて「本來の一心同體」たる民族共同體となることが出來た。従つて日本國家は——ゴットルの用語を用ふるなら——日本民族と同じ意味での「根源的構成體」であり、そしてそこには——ゴットルの所説とは異なつて——何よりもまづ、強い、はげしい「生活親和」の情操が根柢に於いて溢れ漂つてゐるのである。かくてこの國こそ「民族國家」の典範をなすものと言はなければならない。

日本國家がかくの如き本質をもつものとすれば、その中に包被せられた國民としての吾々の存在の意義も明かとなるであらう。吾々の全運命はこの國家に預托されてゐるのである。無論、個人としての吾々は國家の中

にあつて絶えず生死を繰り返し、永久の生命を有するものは一つもない。永久の生命を有しうるもの、また有すべきものは只民族國家としての日本國家のみである。吾々は吾々自身の全運命を國家に預托することによつて初めて吾々自身の肉體の死滅を超えた永久的な國家生命に參與し得るのである。吾々は個々の短かい生命を民族國家から享受し、そして吾々は個々の死滅によつて民族國家の大生命に歸りゆくのである。

吾々の生死がすでにさうであるとすれば、吾々の日常の行動や思考が國家を抜きにして爲され得ないことも極めて明瞭であらう。學者であらうと實業家であらうと、役人であらうと軍人であらうと、若しも吾々の國家が永久に存続しうるといふ保證と確信なくして、吾々のあらゆる行動、あらゆる思索に、果して何の價值があらうぞ。吾々のあらゆる行動とあらゆる思索とは、たゞ國家の嚴存し且つ永久に存続しうるといふ事實によつてのみ價值を生じて來るのである。然らばこの國家の永久の存続は何によつて保證されるか。そこにはまづ、天壤とともに窮りなき日本國家と國體との神ながらの悠遠性が保證されてゐる。しかし、この悠遠性は、無論吾々個々の國民の自己自身を顧みない不斷の挺身努力を裏付けとしてのみ保證され實現されるのである。^{*}言ひかへれば、吾々は吾々自身の全運命を日本國家に預托すると同様に、その吾々自身がまた吾々の祖國の運命を——然り日本國家の盛衰興亡の運命を擔つてゐるのである。かくて吾々はこゝに初めて、吾々は國家の中に、生き、國家と共に生き、否な一層端的にいふなら國家を生きてをる、といふ深い事實の意味を悟ることが出来るのである。

*この點の理解には山田孝雄博士が試みてゐられる天壤無窮の神勅の解説が有益である。即ち博士は、この神勅にあらはれる「豐葦原」といふのは土地の肥えてゐること、また「水穗國」は努力の要ることを意味するとして、かう説かれる。「かくの如くして豐葦原の千秋長五百秋の水穗國は生きることを愛する心を心とし、努力を不斷に油斷なく行つてゆく國である。まことに我が國は神命によつて神の生みなされた國であり、神の直統であらせられる現御神が萬世一系の皇統として天壤無窮の皇位に即きて知ろしめす國家として、即ち神國の名があり、神國の實を具へてゐるところの輝かしい國家であります。この國家、この輝ける國、生を愛するところの慈愛に富む國、努力を永遠に怠らない豐葦原水穗の國である。かう考へていかなければならない。この國の永遠につづくのは生を愛するといふ心と努力を怠らぬといふこと、この二つが國の基になる。この二つの心でこの天壤無窮萬世一系の神國なるものがこゝに現れ出て來たのであります。」(山田孝雄稿、神國の使命と思想戰、『言論報國』昭和十八年十二月號所載)

尙この解説は山田博士が年來の主張たる「中今」の思想から發してゐる。これについては同博士の舊著『大日本國體概論』(明治四十三年刊)を先づ繙くべきであらう。

三、皇國經濟

以上聊か日本國家の何であるかを説いた。國家の本質が明瞭となつたとすれば、この國家の生活を究極的に支へるものとしての經濟の意味もおのづから了解せらるゝであらう。經濟は慥かにゴツトルの説く通り、人間の無限なる意欲と有限なる能力との先天的な食ひ違ひから生ずる「生活困窮」を能ふかぎり克服せんとして爲される人間の營みであると云へる。しかし、この「人間」とは、吾々の場合では國家を抜きにしたる無國籍人でもなければ、世界を通じたる萬民でもない。吾々はどこまでも皇國民であり、吾々の國家はいつまでも皇國

である。さうである限り吾々の營む經濟は無國籍人の經濟でもなければ萬民の經濟でもなく、實は皇國經濟なのである。

皇國は世界に只一つしかないと同じやうに皇國經濟もまた只一つである筈である。無論この經濟は、恰かも皇國が世界の國々の中の一つである限り世界の他の國々と共通したる要素を具有してゐたと同様に、他の國々の經濟と共通したる性格を併せ持つてゐることは慥かである。しかし、吾々は、どこまでも吾々の經濟を、吾々の祖國の經濟として、すなはち世界に只一つしかない皇國經濟として其の本質を捉へ、眞に其の在るべき姿を理解することに努めなければならない。然るとき、吾々の目にうつるところの經濟、吾々自身がその全運命を預托しながら現に營むところの經濟、すなはち一言にして皇國經濟は、まさに次の如きものとして姿をあらはすのである。皇國に於ける「經濟は、物資に關する國家生活の内容をなすものであつて、物資は、たゞに國民の生活を保つために必要なるのみならず、皇威を發揚するがための不可缺なる條件をなすものである。従つて國の經濟力の培養は、皇國發展の一つの重要なる基礎である。」これ即ち、畏くも肇國の當初に於いて、皇祖が親しく生業をさづけ訓へ給ひ、また神武天皇が「苟も民に利あらば、何ぞ聖造に妨はむ」と宣うた所以である。かくて當初から「我が國民經濟は、皇國無窮の發展のための大御心に基づく大業であり、民の慶福の倚るところのものであつて、西洋經濟學の説くが如き個人の物質的欲望を充足するための活動の聯關總和ではない。それは、國民を擧げて「むすび」の道に參じ、各人その分に從ひ、各々そのつとめを盡すところのもの

である。「むすび」とは即ち創造であつて、ものが相和してそこに新たなるものが生ずることを意味する。^{*}従つて創造は和の精神と力のあらはれである。君臣相和し、臣民互に親和して日本國家の創造發展がなされるのである。この「むすび」の精神を本とし、公を先にし私を後にし、分を守りつとめを盡くし、和をもつて旨とする心こそ、我が國固有の産業精神であつて、近代に勃興した商工業の活動といへども固よりこれと同一の精神によつて營まれねばならない。かくてこの精神に貫かれるところ吾々の經濟は國の道德と一致し、道に基づく經濟となり、そしてそれは國民の協力をもたらし、創意を生ぜしめ、進みては國力を支へ培養する強い力となり、さうしてよくわが國體の精華を經濟に於いて發揚し得ることとなるのである。こゝに皇國經濟の本義がある。(文部省、國體の本義、一三六—一三九頁參照)

*「むすび」は「むす」より來てゐる。「むす」はものの生ずることである。苔むすといひ、露むすぶといふが如くである。この「むすび」には、しかし、「和」が先行せねばならない。ものが相和して、そこに新たなるものの生誕がある。この點は、ものの創造を否定の論理から説明する西洋的思辨とは根本から異なる。ものは、辨證法の説くごとく、相對立するものの否定から生ずるのではなく、ものの互ひの和からものが生れるのである。

この點については由良哲次氏の新著『民族國家と世界觀』を參照せよ。氏はその中で、矛盾律と否定の論理に依據するヘーゲルの辨證法の難點を指摘して、「この矛盾と否定の論理を、現實と歴史に適用する時は、常に社會を陰慘なる鬭爭と革命と否定の末世的な攪理史觀を齎らすに至るが常である。現實を矛盾的とし、これを否定的に解するよりも、寧ろ吾等は根本的に現實を生み出し、現實を生産的に理解しなければならぬ。實踐的行爲は、本來論理的思惟ではなく、否定的でなくしてそれ自身肯定的である。國家の現實の意義を許し、個性的行爲の永久的意義を認むる吾等の行爲には、常に歴史に於ける永

恒なるものの肯定を持つてゐる。行爲は否定的なるものとして、もしくは、相否定する二極の對抗緊張の推移として解すべきよりも、寧ろ個性的な實體に根源する生産的な能作をこそ、行爲と解すべきである。」（前掲書一四—一五頁）と説いてゐられる。「否定の論理」を拒斥しようとする試みは示唆的である。

第二節 戦争と經濟

一、聖戰の神髓

社會學者シュタインメツツ (Steinmetz) の定義によれば、戦争とは「相手をして自己の意志に屈服せしめんがために行はれる民族間の武力闘争」であると云ふ。いかにも戦争は第一に武力闘争であり、第二にそれは民族と民族との間に行はるゝものであり、そして第三にそれは一方が他方の意志に屈服するに及んで終止するものである。皇國の行ふ戦争も形に於いては無論この戦争の一般的性格を離れてはゐない。しかし戦争の目的、戦争の精神はこれと大いに異なつてゐる。わが戦陣訓は、

「軍は 天皇統帥の下、神武の精神を體現し以て皇國の威徳を顯揚し皇運の扶翼に任ず」
として、これを次の如く説明してゐる。――

「常に大御心を奉じ正にして武、武にして仁、克く世界の太和を現するものは神武の精神なり、武は嚴なるべし仁は遍きを要す。苟も皇軍に抗する敵あらば、烈々たる武威を振ひ斷乎之を撃碎すべし。假令峻嚴の威克

く敵を屈服せしむとも服するは撃たず従ふは慈しむの徳に缺くるあらば、未だ以て全しとは言ひ難し。武は驕らず仁は飾らず自ら溢るるを以て尊しとなす。皇軍の本領は恩威竝び行はれ、遍く御稜威を仰がしむるに在り。」

吾々はこゝに極めて明瞭に皇軍の本領が何であるかを認めることが出来る。皇軍の本領は神武の精神にある。そしてこの神武の精神とは恩威竝び行ひ以て遍く御稜威を仰がしむるにある。これ即ち皇國の行ふ戦争が常に聖戰であり、また常に皇戰である所以である。恩威竝び行ふといふ聖戰の本質は肇國以來少しも變つてゐない。試みに神典古事記を繙き見よ。皇宗神武天皇は御東征に際して幾多の「荒神」「國神」の抵抗に御遭ひ遊ばされたのであつたが、御平定の第一手段は決して武力闘争ではなかつた。

「故如の此、荒夫琉神等を言向け平和し、伏はぬ人等を退撥げたまひて、畝火の白檮原宮に坐しまして、天下治しめしき。」

と古事記は記してゐる。神武天皇は實に「言向け」と「退撥げ」、換言すれば「荒ぶる神等」には「教」をもつて、「伏はぬ人達」には「劍」をもつて御平定遊ばしたのである。皇軍の本領が斷乎たる武力行使を一面に持ちながら「服するは撃たず従ふは慈しむの徳」を兼ね具へてをるのは、かくてまさにわが皇宗御自から示し給うた惟神の道であつたのである。たゞ漫然と人間の本性に根ざしたものといふ意欲と意欲との衝突、たゞ他國、他民族を脅かし侵略するといふ戦争、——このやうな戦争は斷じてわが皇國の興かり知らざるところであ

る。恩威並び行ひ、しかも相手をして遍く御稜威を仰がしめんとすることに聖戦の神髓は横はつてゐる。

二、總力戦争と經濟

大東亞戦争は無論本質に於いて如上の聖戦である。しかしこの戦争は規模に於いて國史上に類例のない大きさと激しさを持つてゐる。宣戦の大詔には

「億兆一心國家ノ總力ヲ舉ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ違算ナカラムコトヲ期セヨ」

と仰せられてゐる。「國家ノ總力ヲ舉ケテ」の戦ひ、すなはち大東亞戦争は當初から日本國家の總力戰たる性格を有してゐるのである。回顧すれば「總力戦争」“the total war”の概念は第一次世界戦争の終り頃（一九一八年）フランス人ドーデ（Daudet）によつて初めて明かにされ、その後ドイツのルーデンドルフ將軍（Ludendorff）やオーストリアの軍事評論家 ポツソニ（Posony）によつて詳論せられたものであるが、これによると今日の戦争はすべて總力戦争の形態を取らねばならないといふことである。それは何故であるかと云へば、今日の戦争は戦闘技術の進歩のために尨大なる軍備と巨大なる物資の消耗を必須とする。このためには國內に於いて絶えず物資の補給を行はねばならない。物資の補給は戦争が短期間に終る場合には既存の在荷にても間に合ふであらうが、長期戦になればなるほど絶えず新たな生産によつてこれを補給するより外に道はない。この生産が戦線の必要に應じきれない場合には戦闘の續行は不可能に陥る。これ即ち今日の戦争は巨大なる消耗戦であり、従つて同時に撓みなき生産戦であると呼ばれる所以である。しかもこの生産戦は次の如き仕方

國內の人員を直接的な軍需品の生産に立ち向はしめる。すなはち戦線に於いて一人の兵士を休みなく活動せしめるためには國內にあつて九人乃至九人半の人員が武器彈藥の生産に従事しなければならぬ（ボツソニの計算）。この計算よりせば一〇〇萬の兵士を活動せしめるためには四、五〇〇萬乃至四、七五〇萬人が軍需品の生産に働かねばならない。かくて今日の戦争が何故に總力戦争と呼ばれるかの理由は明かであらう。國內にあつては一人として閑暇を貪るものあるを許さないのである。

大東亞戦争がかくてすでに巨大なる生産戦であり、従つてまた國を擧げての總力戦であるとすれば、吾々の營む經濟がこの戦争を抜きにしては考へ得られないことは極めて明瞭であらう。皇國の存立發展のためにある吾々の經濟は、今や、皇國の當面する大戦争を支へ且つ完遂せしめる最重要なる基盤としての任務を果さねばならない。總力戦が國を擧げての生産戦であることの意味は、それが國の經濟力を擧げての經濟戦であることと同じである。

およそ一國の戦争力は直接的には軍備の大小によつて決せられる。これがその國の現實的戦争力である。しかしこの戦争力は前述の如く絶えず補給されねばならず、そのためには絶えず生産されねばならず、また軍備のための生産を大規模に續行するためには今まで軍需品の生産のために用ひられてゐた生産裝置（工場、機械、交通機關等々）を戦争目的に動員しなければならぬ。かうして一國の戦争力が支へられ強化せられるとすれば、これらの經濟力はそのまゝで戦争力の一部たる役割を擔ひつゝある。されば學者は實際の軍備を現實

的又は顯在的戦争力と稱するに對して、經濟を潜在的戦争力、war potential と名付ける (Paul Wiel 説)。潜在的戦争力は戦争目的に動員せられてこゝに初めて現實的戦争力となるのである。經濟は今や明白に個人の欲望充足のためにあるのでもなければ、私的利益の追求のためにあるのでもない。それはすでに一國の戦争力である。否、一國戦争力の源泉である。この源泉にして活動を萎縮するか、或ひは戦争目的を離れて營まれるといふことになるならば、現實的戦争力は忽ちその根本源泉を失ふに至るのである。吾々はこゝに戦争に向つて寄與する經濟の重大なる意義を悟らなければならない。^{*}

^{*}戦争と經濟との關係については數多くの文獻があるが、最も手頃なるものとしてピグー教授の『戦争の經濟學』(邦譯あり)及び中山博士の『戦争經濟の理論』を熟讀せよ。

三、統制經濟の必然性

こゝに於いて國家が吾々の經濟の各面に互つて指導的干涉を加へんとするのは極めて當然であると云はなければならぬ。今や物資の生産も、流通も、消費も、すべてが戦争目的につながるものとして計畫的な秩序のもとに營まれねばならない。これ即ち統制經濟である。

統制經濟は嚴密にいへば必ずしも戦争の所産ではない。それは自由經濟と呼ばれた今までの經濟が圓滑に自からを運営し得なくなつたことに基づいてゐるのであるが、しかし統制經濟が國家意志に従つて急速に且つ大規模に實現せらるゝに至つたのは無論戦争の必要からである。戦争の必要はしかし、たゞ戦線に於ける戦闘力

の持續強化のみから起るものでないことに注意せねばならぬ。國家は戰鬪力の持續強化を圖る半面に於いて、絶えず國內に於ける國民生活の安定を確保しなければならぬ。戰鬪力はたとへ敵を壓倒するに足り得るとしても國內に於いて例へば物價が暴騰し、貨幣價值はなくなつて紙屑同様となり、生活必需物資が偏在し、富める者のみが飽食暖衣し得て國民の大部分が飢えに泣くといふ如き事態が発生するならば終局的な勝敗の數はおのづから明白である。(第一次世界戦争に於けるドイツの窮狀を想起せよ。)かくて統制經濟は戦争力の確保培養と戰時に於ける國民生活の安定確保との二大目的をもつて行はれてゐるのである。

第三節 皇國經濟の基礎構造

經濟は吾々の營みであり、しかも物財(＝財貨)の生産・配給・消費に關して行はれる吾々の日常の營みであるが、この營みが常に一定の秩序・組織のもとに行はれる限り吾々は經濟を「ゴットル」の用語に従つて一つの「構成體」であると考へてよい。然るに構成體としての經濟は必ず次の二つの基礎の上に立たねばならぬ。一は人種的、又は民族的基礎、二は生活空間的基礎である。以下少しくこれを皇國の場合について説明しよう。

一、民族と人口

皇國の民族は、人種學的には可なり多くの異なる要素の混合から成つたものと云はれてゐる。古事記その他

の古典にもすでにこの事實を思はしめる多くの異種族名があらはれてゐる。例へばクマソ、ハヤト、エミシ等々がそれである。しかし主體はあくまでも高天原族又は天孫族であつて、これを中心にして出雲族その他多くの異なる種族が融合同化されたのである。

社會學者の研究によれば、右の如き日本民族の人種的構成は、この民族の精神構成に實に見事なる結果を招來した。何故といふに高天原族は感情の優美と溫雅とに最大の長所を有したけれども、それは必ずしも意志の強者、道義の優者ではなかつた。それは本來主情的性格の持主であつた。然るに、これに融合同化したる異種族、とりわけ數に於いて非常に多かつたエミシは主意的性格の持主であつて、剛勇にして道義心固き人種であつた。彼等が當初、容易に同化し得ざる異種であつたことも結局、かゝる性格の發露に他ならなかつた。朝廷より見れば彼等は頑迷不順の民であつたが、それは彼等自身の立場から見れば、みだりに他族に屈せざる自主豪勇の人であり、いはば義を重んじて二主に見えざる忠義の士であつたとも解し得る。さればこそ一旦翻然として皇室に歸順するに至れば驍勇忠誠の民として皇室に盡し奉つたのは決して不思議ではない。もともと情けの道として發達したわが武士道に剛健なる性格の一面を附與したものは、まさに彼等エミシの魂であつた。かくて日本民族はこれら異種族の同化を通じて、その本來の主情的性格と異種族の主意的性格とを合せてわが獨特の民族精神を發達せしめて行つたのである。

日本民族の構成につき今一つ忘れてならないことは、後代に於いてわが國に入り來つた多數の歸化人（主と

して韓人、漢人)の顛末である。彼等は多く美術・工藝・土建・商業等に從事し、實質的に日本の産業階級として發達して行つた。瀬戸や薩摩の焼物は就中著名なる彼等の産業であつた。かくて日本民族はその指導的構成分子たる高天原族によつて感情の美しさを供給せられ、次いで蝦夷族により剛健なる道德的意志を補はれ、そして最後には漢人種によつて商工業的才能を獲得し、こゝに精神的素質に於いて極めて優れたる、しかも甚だ多彩なる民族性格を保有するに至つたのである。^{*}尙、明治以降の日本産業界には曾ての武士階級が非常に多く入り込んで行つた事實も輕視されてはならない。維新によつて秩祿處分を受け生活の方途を失つた武士階級(明治五年にはなほ士族・卒族・地士を合せて實に一、九四四、五五七人の士族人口が現存してゐた)は謂ゆる士族授産として明治政府の援助のもとに幾多の近代産業の創設に着手し、皇國經濟發展の基礎を築き上ぐるに貢献したのである。それ故に皇國の産業階級の中には、常に漢人種から承けついで産業精神だけではなく實は多分に濃厚なる武士道階級の血液が流れてゐるのである。「士魂商才」といふ言葉が明治時代の産業家によつて愛用せられたのは決して單なる思ひ付きや誇張ではなかつたのである。

^{*}日本民族の精神構成については大阪商大教授關榮吉論文集『國體と全體主義』(昭和十八年)に見事なる分析が盛られてゐる。就いて見よ。また日本の民族構造との關聯に於ける日本經濟の獨特の發展については難波田春夫氏の名著『國家と經濟』第四卷、又は同氏の最近著『經濟哲學』を披見せよ。

以上の如き民族的基礎は、これを數量的に表現するとき、こゝに「人口」なる概念が生ずる。皇國の現在人

口（昭和十五年國調）は内地七三、一一四、三〇八人、朝鮮二四、三二六、三二七人、臺灣五、八七二、〇八四人、樺太四一四、八九一人、關東州一、三六七、三三四人、南洋群島一三一、一五七人、全版圖合計一〇五、二三六、一〇一人にして、遂に一億を突破するに至つた。世界に於いては―その植民地や屬領を除いて考へると―支那、印度、ソ聯、アメリカに次いで第五位にある。

二、生活空間

次に第二の基礎たる生活空間は、その上に經濟が營まれる抑々の地盤であつて、これは詳しく言ふと立地空間、培養空間、資源空間、及び交通空間に分たれる。立地空間とは構成體たる經濟に對して供せられる存在の場所であり、培養空間とは有用なる動植物の飼育増殖のために供せられる地面であり、資源空間とは土地資源や動力源泉の含められた場所であり、交通空間とは自然的な地上及び水上の交通路を指してゐる。

これらの諸空間は何れも一國の經濟存立に無くてはならないものであり、またこれら諸空間の廣狹や適否は經濟發達に、否な國家そのものゝ發達に至大の關係をもつてゐる。就中重大なる條件は資源空間の廣狹にある。わが皇國は、内地總面積わづか三八二、五六〇・八三方キロ、しかもこの中に含む資源空間は必ずしも恵まれてゐない。特に近代工業原料に於いて然りである。しかし、さらばとて皇國の資源空間及び培養空間は決して歎くには當らない。土地は肥沃であり、林産及び水産資源は豊富であり、また特殊のものは除いて燃料及び礦物資源はいまなほ開發の途上にある。さうしてこの點に於いて、皇國經濟の生活空間を彌が上にも補強す

るものはまさに、大東亞戦争とともに着々その基礎を固めつゝある大東亞共榮圈^{*}の建設である。滿洲國の雜穀類と鑛物資源、北中支の棉花と鑛物資源、さらに南方諸地域の燃料、鑛物、その他多くの近代的工業資源——これらすべては皇國經濟發展の將來を確約して餘りがある。これに對して皇國の寄與すべきものは技術と資本、否な何よりも先づ組織の力と指導の精神なのである。

^{*}これは時に「廣域經濟」と呼ばれる。しかし大東亞の場合は八紘爲宇の大精神の現はれとして企畫されてをるもので、それは歐米流の「廣域經濟」ではない。むしろ「共榮圈」こそ最も適切な呼び方である。この點、文部省制定の「商業經濟論敎授要項」は注意が充分に行き届いてゐるとは云へない。

三、企業と經濟組織

さて今や、以上の如き民族的並びに空間的基礎に基づいて皇國經濟は構成せられ、運營せられ、また將來に於ける彌榮を實現しようとしてゐる。而してこの運營を指導するものは皇國の政治であり、皇國そのものであるが、この運營を實際に擔當するものは皇國經濟の構成單位たる「企業」である。

企業はゴツトルによれば、やはり一つの社會的構成體である。しかしこの構成體は國民經濟といふ巨大なる構成體（これを包括構成體といふ）の中に包含されるものであるから在內構成體と名付けられ、またそれは或る特定の目的を定めて創設され、その目的が達成された場合は何時にても解體して差支へなきものであるから目的構成體とも呼ばれる。

それならば企業の目的とは何であるか。今日までそれは一般に貨幣收益の獲得にありと見られ、またさう考へて誰もが不思議に思はなかつた。しかしながら時代は推移し、經濟の精神も姿態も急速に變化して、企業はもはや私益追求の組織としては見做されない。企業は皇國經濟の實際的擔當者としての使命を自覺するに至つたのである。それは皇國の政治的或ひは軍事的目的達成のための構成體であつて、その精神には皇國の國家意志が貫徹されてゐなければならない。従つて企業は今や私益の保證せられない場合にも存續運營が命ぜられることもあり、反對に又、いかに有利なる企業と雖も皇國の立場から不急不要と認めたるものは解體統合を命ぜられるのである。かくて企業は急速なる整備統合の過程を経て、愈々その本來の職能精神に立ち歸りながら、公社・營團・統制會・國策會社等々の新形態をとつて逞しき發足を爲しつゝある。^{*}而して、かゝる新形態の企業が新經濟精神をもつて皇國經濟を實際的に構成し且つ擔當して行く場合、こゝに全體として現はれるものは無論從來の意味に於ける資本主義經濟組織でもなければ自由主義經濟組織でもない。それは統制經濟組織である。

^{*}統制經濟下の新企業形態については手近かなところで山城章氏著『新企業形態の理論』（昭和十九年）を參照せよ。

第四節 皇國經濟の流通機構

一、生産と流通

一國の經濟は前節に述べたる如き民族的並びに空間的基礎の上に立ちながら單獨個人、集合法人、又は官公

營の企業によつて組織運営せられて行くのであるが、かくして成り立つ一國の經濟はその作用の點から見ると二つの大きな部面に分たれる。一は生産部面であり、二は流通部面である。

生産部面は農業・牧畜・水産・林業・鑛業等の如く資源空間及培養空間の開発利用によつて有用なる財貨又は財貨資源を獲得生産するものと、これらの資源を結合し加工することによつて更に有用なる財貨又は生産要具（機械その他）を製造する工業とから成り立ち、流通部面はこれら一切の財貨及び財貨資源を生産者より需要者に致すところの廣い意味に於ける商業より成り立つ。國民經濟のこの二つの部面に應じて企業も亦おのづから二つに分たれる。生産部面にたづさはるものが産業企業であり、流通部面にたづさはるものが商業企業である。

二、商業の本質

さて「商業」は通常、座して利を貪る無用有害の寄生的存在の如く見られてゐる。しかしそれは本來の意義ではない。

商業學者の研究によると、「商」の字義的起源は「商」にあると云はれてゐる。これは「商」と「貝」とを合したるもので、「貝」は財貨を意味し、「商」は「從外知内」で、外から内を推する商度又は憶測の意である。さればこれを合したる「商」は財貨に關する商度といふことで、今日ではこの商をさらに略して單に「商」と云ふけれども、意義は變らない。すなはち商とは「章其遠近、度其有無、通四方之物」で、遠近を明かにし、

有無を計らつて、四方の財物を融通することで、簡単に云つて物を通ずる、すなはち「通物」が商の眞義である。かくてそこには、今日の統制經濟に於いても必要不可欠なる財貨の配給といふ職能こそ本質的職能として含意せられてゐるけれども、利益追求などといふ觀念は初めから何處にも含められてゐなかつたのである。

こゝに於いて商業の本資は次の如く規定してよい。即ちそれは財貨の配給にある。配給とは財貨を生産者より消費者に致すといふ國民經濟上の流通部面に於いて其の圓滑なる運營を確保するために、致されるところの諸機能の綜合概念である。かゝる諸機能には

- (1) 所有權移轉機能（交、易、賣、買、機、能）
- (2) 物理的移轉機能（運、搬、機、能、貯、藏、機、能、收、集、分、散、秤、量、包、裝、荷、造、標、準、化、等、の、數、量、的、移、轉、機、能、
並びに檢、査、選、別、格、付、混、合、等、の、品、質、的、移、轉、機、能）
- (3) 資本的機能（金、融、機、能）
- (4) 危險負擔機能（保、險、機、能）

等があり、これらすべてを「配給機能」と稱するなら、このやうな配給諸機能の綜合概念が「配給」であり、またそれが「商業」に他ならない。かくて商業は一國經濟の機構中に於いて脱落することの出来ない役割を演ずるものである。^{*}

^{*} 商業の本質及び機能に關する上來の説明には専門學者の間に若干の異説があり得るやにきいてゐる。こゝでは取敢へず深見

三、新時代の商業と理論經濟學

回顧すれば商業は、その本質に於いて依然變りがないとしても、一國經濟に於いて占めた地位には變化があつた。自由主義經濟に於いては商業こそは農業・工業その他一切の産業部門の先頭に立ち、この部門に對して生産の方向や範圍までも指示する指揮者たる地位を占めてゐた。これ即ち商科大學乃至高等商業學校の出身者が“Captain of industry”たらんことを目標として社會に出でた所以であり、また學問としては農業學校や工業學校には無かつたところの「理論經濟學」なるものが吾々の側に於いて獨特の發達を見た理由である。

然るに今や統制經濟の新時代に入つて、生産の指揮は云ふまでもなく流通部面の統制さへ國家がこれを行ふに至つた。こゝに於いて商業はその地位を變へなければならない。それは即ち全體的な國家意志の指導下に立ちながら、國家的企畫の線に沿うて生産部面で生産された財貨を消費者にまで移轉し、且つこれに附隨する一切の流通的機能を果すことである。これらの諸機能、すなはち前述の配給諸機能は、現下の統制經濟がいかに強化せらるゝにしても無用となることは絶對にあり得ない。それどころか大東亞共榮圈が確立された場合、また進みて新たな秩序のもとに世界平和が確立された曉、往時の自由經濟は無論そのまゝ復活しないにしても商業の演ずる役割が益々重大となることは必定である。皇國經濟の空間的基礎が擴大すると共にその流通部面をつかさどる商業の活動範圍も亦擴大せざるを得ない。要は流通部面の圓滑なる遂行によつて飽くまでも皇國

經濟の發展に寄與せんとする強い自覺にある。

然らば最後に、これとともに「理論經濟學」はどうなるか。無論それは大戦争下の今にあつてさへ吾々の側に残つてゐる。否な、これは、經濟専門學校の新たなる登場とともに今までよりも一層重要な科目となつた如く思はれる。しかしこの學問には、流通部面そのものゝ姿が變つた如く、新たなる精神が打ち込まれねばならない。その精神とは取りも直さず國家精神であり、皇國の精神である。經濟學はかくて實質に於いて國家經濟學となり、皇國經濟學とならねばならぬのである。吾々は、かゝる意味に於いて新たなる精神の貫かれた經濟學理論を構想しながら、それを詳しく講究する日を待つであらう。諸君の仕事は今、本章に簡約せられた皇國經濟の眞の姿と精神とを絶えず念頭に置きながら、商業的諸機能の本質を系統的に學び進まるゝことである。

参 考 書

註記 特殊問題に關するものは本文中の該當箇所指摘して置いたので、こゝには一般的な参考文献のみを掲げる。披讀しゆく順序も亦これに従ふを便とするであらう。

- | | | | |
|-------|-----------|-------|-------|
| 文部省編 | 國體の本義 | 昭和十二年 | 文部省 |
| 清原貞雄著 | 國體論史 | 昭和十四年 | 東洋圖書 |
| 河野省三著 | 國體觀念の史的研究 | 昭和十七年 | 日本電通社 |

- | | | | |
|----------|-------------------|----------|---------------|
| 山田孝雄著 | 大日本國體概論 | 明治四三年 | 實文館 |
| 寛 克彦著 | 國家之研究 第一卷 | 大正二年 | 清水書店(最近に新版出づ) |
| 牧 健二著 | 增訂日本國體の理論 | 昭和一八年 | 有斐閣 |
| 大串兎代夫著 | 日本國家論 | 昭和一七年 | 講談社 |
| 關 榮吉著 | 國體と全體主義(論文集) | 昭和一八年 | 青年通信社 |
| チエレーン著 | 領土・民族・國家(金生善造譯) | 昭和一七年 | 三省堂 |
| ゴットル著 | 民族・國家・經濟・法律(金子弘譯) | 昭和一七年改訂版 | 白揚社 |
| 難波田春夫著 | 國家と經濟 第四卷 | 昭和一八年 | 日本評論社 |
| 宮田喜代藏著 | 國家經濟學の立場 | 昭和一八年 | 甲文堂 |
| 神戸商大新聞部編 | 經濟及經濟學の再出發 | 昭和一九年 | 日本評論社 |